東京学芸大学連続講演会　第9回

「質疑応答・フリーディスカッション」

河村町長：実は、私今、町の方で、先程、学校の話を若干させていただきましたけれども、学校の校長先生だとか、学校の教員がですね、赴任してきたときに、ひとつ挨拶の中でまったく同じことを言っております。「空気がいい、水がいい、それから人柄がいい。その地域に育つ子供は、丈夫な、この町にあった子供に育ってほしい。」という話をしております。これから、先生を目指す方々に理解していただきたいのは、それぞれの地域に育った良さというのがあるはずなんですね。学力だけじゃなくて。奥多摩で育ったように、例えば山をよく知っているとか、川の水の渡り方が大事であること、川で流されないということ。私達は小さい時には、自然に先輩方から体で覚えさせてもらったんです。流れによって斜めに渡る、斜めの距離は自分で考えるということを教わったわけです。それから、小学校や中学校の時には、ほとんど自分達の近くの山は全部学校の行事として登りました。今、私どものところに来る教諭は、子ども達を山に連れて行きません。連れて行って迷って、大騒ぎしたことがあるんです。それでいいのかと思います。

逆に学力の問題で言いますと、ここ2年くらい学力検査をやってみると、26市23区13町村の中で悪くないです。西多摩8市町村中で2番です。だったら、もっと特徴があって、自分達の町で育って、どこがいいという誇りを持たして欲しいなということを、今先生方にお願いしています。今先生は大変だと思うんですけれども、何年か後に移っちゃってですね、じゃあここへ行った時は皆さんこれをやろうという気持ちがあるかもしれないけど、特徴を持ったそういう育て方をしてもらうとね、いろんな意味でもっと強いきずなが出てくるのかなという気がしております。そんなことを、ちょっと余計なことですけど、言わせてもらおうかと思っています。

コーディネイター小泉：ありがとうございました。次は小野寺先生お願いいたします。

小野寺氏：大学に勤めている身なので、教師の立場なので申し上げることもあまりないですけれども、今私が教員をやっていて感じるのは、今の大学生は、非常に一生懸命ずっと勉強をしてきて、大学へ入ってきた学生さんで、遊んでないということが言えるのかなという気がしています。遊び心がないのかな。単位で縛れば来てくれるんだけれども、自主的にどっかに行ってもらうことがなかなか難しい、というのが実情かなと思っています。私どもの大学でも、いろんな働きかけをして、「こういった、こういうシンポジウムがあるから来てごらん」と言うんですが、事実上ほとんど来ないんです。悲しいことにですね。仕方がないのですね。私なんかは授業中、「博物館でいい展示があるので、そこの博物館に行って、そのときの入場券の半券を持って帰ってきて、それをくっつけたら10点プラスしてあげるよ」と言っています。そんなことはしたくないんだけども、そのくらいの強制をしないと来てくれない。だから、実習で単位化すればなんとか来るけど、お金が高くてだめですってみんな言うんですね。確かに苦しい。私も子どもが2人大学生になって、火の車になっちゃってですね、妻もバイトを増やす……状態になった時に、やはり大学の授業料はバカにならないので、学生さんもバイトしている。だからやっぱり出られない。そういう悪循環があるのかなとに思っています。だけどそういう中で、やはり教員になるような人たちには、特に自然と親しんでもらう大学生のアイライン、親しんでもらうことがとても重要だというふうには認識しています。それをどういうふうに親しませるか、つまり、遊んだことがないので、自然とともにね、だから川にも入ったことがないし、学校のプールがあるので、そのほうが楽だよと言われてきてるわけですから、川との遊びの仕方、これはあのNPOの方が教えてくださったりして、小学校の子ども達を遊ばせたり、大学生もカヌーですとか、川でどこかに行くとかそういうことを教えてあげる。そういうことの勉強をいっぱいさせていきたいと思っております。

小泉：ありがとうございました。町長さん、教育について、もう少し町で考えてたりするようなことございませんか。

河村町長：今、小野寺先生が若干触れましたけども、

教員になって地域で喜ばれる先生は、やっぱり自然のいろんなことを知っているだとか、経験、実際にその地域にどう入っていくかということなのかな。そういう点ではね、芸術の問題についてやっている部分、川だけじゃなくて、あるんですね。

うちはわりと、郷土芸能が盛んなんですね。小学校の男性教諭と女性教諭が夏になると、14箇所くらい郷土芸能の獅子舞があって、そこの笛を地元に行って吹くんです。地元で笛を一緒に吹いて、子ども達にも獅子舞を舞ってもらう。それを見ていた時に、やっぱりそのコミュニケーションて言うんですかね、その地域に子ども達とのコミュニケーション、それから地域のコミュニケーションをとるという先生がたぶん、ちょっとしたことでも、問題が起こらないというふうに僕は感じています。今大きな問題になっている、先生がいじめたというお話がありますけれども、これなんか最たる例。私に言わせればね、そんなのはいじめのうちではなくて、それ以前の問題で、コミュニケーションがうまく取れなかったことによって、いろんなことが起きてるのかなという感じを受けています。そういう点では、バリアを張ってしまうんではなくて、昔からの諺に必ずありますけれども、「郷に入らば郷に従え」というか、そういう地域の中のある一定のことを理解するということは大切なのかなという気がしています。そうすると、逆に言うと、「先生こんなことやってみようよ」ということを子どもから逆提案があるかもしれないし、「先生一緒にこの山に登ってみない」という逆提案があるかもしれない。それをどう受け止めていくかということが、私は必要だと思って、特に私どもの学校は小規模校ですから、結構自由に先生と子どもがコミュニケーションしてるんですね。それに関しては、いろんな意味で、さっき言った郷土芸能もそうですし、それからもうひとつでは吹奏楽を非常に熱心に教えてくれる先生がいるんですけれども、そういう先生に関しては、本当に子ども達が生き生きとしてやっているんで、もちろん勉強していただかないと困るんですけれども、それはトータルとしてね、そういう問題になってくるのかなという気がしています。今日はいい機会だから、ちっちゃな町のいろんなことやこういうことも話をさせていただければいいかなと思ってきたんですけれども、是非ですね、バリアを張るのではなく、そういう踏み込んだ教育をしていただいたらいいのではないかなというふうに思います。

小泉：私の場合もですね、例えば、平井川に学生を連れて行って、「川の中で石を通って向こうに渡りなさい」とかね、やっても、やる必要は本当は全然ないんですけども、そういうことを言わないと全然体験がないんですね。ですから、こうやって学生諸君には、そんなことをやらせたりしている。それから崖を登れとかね、3mくらい崖を登って下りることはなんてことはないんですけども、崖を登ったことがないんですね。「落ちたらどうします」って落ちたら滑って擦り傷ができるだろうなんて言ってますけども。怪我はされちゃ困るんですけれどもね、やっぱりそういうちょっとした些細な体験と小さな冒険、それから小さな失敗ですよね。崖から転がり落ちて、イテっていうのをやっとかないとやっぱり具合が悪いこともね。ただ先生になるような人は、特にそういうところはいろいろ今のうちにですね、やってほしいと思っているんですけれども。あと10分くらいしか時間がなくなってきましたけれども、今学生諸君とかですね、ちょっと前に出たくらいのOBの諸君とかいますけれども、みなさん今日の話を聞いてですね、それで今、こちらではですね、ちょっと本来の話よりも少し違って、教育学部の学生としてですね、将来教員になってどうするかという話がちょっと出てますけれども、そんなことに関して何か意見だとかコメントだとか質問だとかですね、あったらちょっと出してもらえますか。

発言者A：自然文化誌研究会の菱井といいます。今年の春大学院を卒業させてもらって、現在NPOの事務局をやっております。来月中には、今度はお話にもでてきた小菅村の方に行って、僕も移住をしまして、都市と農村をつなぐような活動をずっとこれから続けていこうと思っているんですけど、先ほどの教育の話の中で思ったのが、地域のことの魅力を知らないとできないんだなというのはすごくよく分かっていて、普段小菅村もフィールドにして子ども達を対象としたキャンプの活動だとか、一般の人に向けた郷土食の体験なんかをやらせてもらったり、当然講師をしていただくのは、そういう村で長く生活してきた方々で、村をよく知ってい

る人に教わる立場で、僕も教わりながら子ども達と一緒に活動させていただいているんですけど、自分で興味関心を深めていける、自由に深めていけるフィールドというものが、都市部にはなかなか少なくなってしまっていて、そういう山村というような話も出てきましたけれども、そういったところへどんどん行ける、行って自分が何か興味があることにどんどん行けるような体制を、僕たちNPOだとか、地域の人たちと一緒に、奥多摩町とか、小菅村とか、そういうところの市町村のレベルでいろいろ協力していかなきゃいけないのかなというふうにすごく感じています。僕たちは、隣にいる学生なんかも、ここで農業体験やってますけども、もう少し僕もどんどんどんどん出て行きたいなと思っているんですけれども、ちょっとずつでも学生たちを巻き込んでやれたらというふうに思っています。

小泉：ありがとうございます。隣の方、もし何かコメントがあったらどうぞ。

発言者B：学芸大学環境教育専攻しています、3年の堤と申します。今日はお話ありがとうございました。学生がなかなか遊びに行ってくれないという小野寺先生のお話を聞いて、やはり、僕たちの世代をみると、自分の好きなことをやっているというか、よく先生方には教養が大事だとおっしゃってくれるんですけど、そういったものが確かに足りないのかなというふうなことを痛感しています。それで、単位をあげればいいのかっていうことを今……（会場笑い）、確かにちょっと嬉しいかもしれないんですけれども、それだと意味がないとかという話にもつながってくるので、やっぱり連携といったことがすごく大事になってくるんじゃないかなと思って、いろんな人が集まっている空間っていうのがすごく大事だなあと思います。というのは、自分の興味関心が狭くても、そこからそれをつなぐものというものがあれば、いろんなところへも行けたり、自分の世界が広がるというか、そういうふうにもなってくるので、そういったきっかけになればなと思っていて。なので、単位はあげてもいいんじゃないかということになりますが、目的がちゃんとしてれば大丈夫なのかなというふうに思いました。

小泉：ありがとうございました。じゃあ後ろで立ってる横川さんなんか一言どうぞ。

発言者C：環境教育3年の横川といいます。私は小泉ゼミに所属しているんですけれども、そのゼミで、自分たちで行きたい場所を計画して、いろんなところに巡検や調査に行ったりしているんです。計画することで、積極的になれたのかなと思っています。

小泉：ありがとうございました。あと何分かありますけど、ちょっと皆さんからですね意見をいただく前に、町長さんにですね、今さっき私も言いましたけれども、都が林業の再生事業というのを始めてですね、予算がついたと思うんですけども、林業の実際現場で働く人がですね、やっぱりかなり危険な仕事でもありますし、それから募集してもですね、年をとった人が例えばたくさん来て、昔やったからっていうことがあるんじゃないかと思うんですけど、結構やっぱり危険が多くてですね、その辺はどんな風な解決策というか、そんなことはないかもしれませんけど、この際ですから、ちょっと教えていただけませんか。

河村町長：林業は、わりと皆さん簡単にできると思っているんですけど、やっぱり結構技術がいるんですね。東京都の森林組合になったんですけれども、奥多摩町の森林組合があるときに、いろんな人が来て働いております。例えば、30代だけれども、プログラマーだったけれども、お金の問題じゃないと、自然の中でやりたいという人も来たりしてます。そういう中で、事故が2件くらい起きているんですね、実は。死亡事故が起きているんです。というのはですね、昔の林業に携わっていた人たちは、必ず親方というか年寄りが結構いましてですね、その人について何年かその仕事の仕方というのを教わってきたんですね。非常に今スピーディーになっちゃったもんですから、例えば木を切るにしてもですね、それから下刈りをするにしても今は、下刈りをほとんどやりません。木を切るのもチェーンソーです。従来は下刈り鎌で下刈りをするわけですから、下刈り鎌を持っていって現地に着いたときに、まず鎌の切り方から始めるわけですね。その現地に行って一服するという意味もあるようなんです。それはそこに、坂道を上がっていったんだから息を整えて、鎌を切れるようにしてから、仕事を始めようという、そういうことがあるんです。それから木を切るときにもですね、の

こぎりと斧で切っていた場合には、切り口を入れてからのこぎりで切るわけですけれども、50年60年たった木というのは、必ずしまります。しまるときに杭を打つんですけれども、今のチェーンソーはしまる前にいっちゃう、ばーっと。だから、場合によっては倒れて裂けてしまったり、実はこの裂けたやつが一番危ないんですけど、その裂けたやつをまた切ってしまう。ところが跳ね返ってきます、バーンと、それで亡くなっちゃうんですね。だからそういうことを、昔の人は仕事を、歩きながらいろんなことをしながら教えてくれたんですけれども、そういうことをまず教わる、それから訓練をするということを経てやるということが必要なのかなという気がしますね。そういう点では今、さっき私の話の中でも、都会の人が「森林開発ボランティアを」ということで、8人くらいの登録している人には、今ほとんど下刈りをやるときにも、自動の下刈りを持たせておりません。それから、チェーンソーも持たせておりません。昔と同じ手の鎌と、それからのこぎりと斧でやらせています。下刈りをやりながら、「チェーンソーがこういうことが起きるんだよ」という話をしているようですから、そういう段階をやっていけばいいのかなという気はしますね。それから話はちょっと違うんですけれども、僕はオートバイが好きなんですけれども、私どものオートバイの時代はですね、50ccから乗り始めたんですね。50cc、125cc、250cc。もう450ccはもうすごいものだと思っていたわけです。ところが自分の息子は、もう30代なんですけれども、いきなり450ccに乗っちゃうんですよね。免許を取ったら。それで、案の定、バイクで事故を起こしたんです。もう私は「そういうことはだめだ」と言っても聞かないわけでね。だから、自分の培った部分というのはすごく大切かなっていうことで、うまく言えないんですけれどね、自分の息子にも聞かれてることだからうまく言えないんだけれど、非常にそういった意味でも段階的なものというのは必要なのかなっていう気がしますね。

もうひとつ、さっき私が聞いてて、逆に私達が勉強しなくてはいけないかなと思うことがひとつ分かったんです。それは、（参加者を指し）彼は小菅村に住んでいると言いました。僕ね小菅はすごいなっていうのは思っているんですよ、実は。それは、人を受け入れられる体制がすごくできているという意味でね、もちろん広瀬村長、その前の古屋助役が一生懸命受け入れ体制を作っている。それから中村文明さんも一所懸命やってますけれども、人を受け入れる、また若者が入っていけるという環境を作って入っているようですから、それは勉強させてもらいます。これはね、大切なことでしてね、皆さんに、「かっこいいことばかり言ってるけれど、おまえのところ、若者が入るような体制つくってないんじゃないか」と言われるとね、一言もありません、はっきり言って。ただひとつ嬉しいのはですね、日原というところに、若者が入ってきています。自ら入って来て働いてくれています。今その若者にいろんな委員会の委員をやってもらっています。非常に嬉しいんでやってもらっています。それから東京都のレンジャーなんかも、北山君っていう男の子なんですけれどもですね。その彼は彼なりに悩んでた部分もあったようですけれども、逆に言うと新たな若者が入ってくれるような、あるいは来てもらえるような体制というのは、私自身も作っていく必要があると今感じました。前から感じていることなんですけれども、反省いたしました。私も頑張っていきたいと思います。

小泉：ありがとうございました。時間がきたんですけれども、最後やっと少し教育学部らしい議論になったような気がします。時間がきたので今日はこれでおしまいです。2人の先生にまた拍手をもってお礼しましょう。